

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 25 日現在

機関番号：64302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520791

研究課題名(和文) 神都物語：伊勢の近現代史 (1869年 - 2013年)

研究課題名(英文) Tales of the Sacred Capital: The Modern History of Ise (1869-2013)

研究代表者

Breen John (Breen, John)

国際日本文化研究センター・海外研究交流室・教授

研究者番号：90531062

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：伊勢神宮は日本の最も重要な聖地の一つであって研究はおびただしいが、伊勢神宮の近現代史に限っては研究がないも同然である。本研究は明治維新から20世紀をへて今に至る伊勢神宮の通史をこころみるものである。

伊勢神宮の天皇、国家、そして国民との関係をつねに視野に入れながら、波乱万丈の近現代史をたどる。明治期における伊勢神宮の空間的改革、伊勢をめぐる戦前のメディアなどの言説、戦後における伊勢神宮の法人化および脱法人化の動きに光をあてる研究である。

研究成果の概要(英文)：Ise is one of Japan's most sacred sites. There is much research on its long history up until the 19th century but next to nothing is written on its modern history. This research project is an attempt to plug the gap and write an introductory history of modern Ise from the Meiji Restoration of 1868 through the prewar years to the present day.

The present research keeps a constant eye on the Ise shrines' relationship to emperor, state and people, as it surveys the main turning points in the past 150 years. Amongst other things, it aims to shed light on the spatial transformations in the Meiji period, the media coverage and other Ise discourse in prewar Japan, and the privatization and subsequent attempts at "deprivatisation" that characterise Ise's post-war history.

研究分野：近代史

キーワード：伊勢 宇治山田 聖地 式年遷宮 天皇 御師 旅 脱法人化

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本史上最も重要な聖地である伊勢神宮については、研究がもちろん多いが、これまでの大きな盲点は明治維新以降の近現代史の研究である。古代、中世、近世なら優れた成果が夥しいが、19世紀後半から戦後までの伊勢神宮の歴史については、殆ど研究されていないのが現状であった。

(2) 2013年に行われた式年遷宮の数年前から伊勢神宮はメディアなどから注目を浴びはじめていたが、(日本の近代史が専門の)研究代表者はその近現代史を語る研究のなさを痛感して、研究に乗り出すことにした次第である。

(3) 近現代史の研究は、全くなかったわけではないことを記しておく必要がある。本研究を開始した時点において、神宮司庁編『神宮・明治百年史 上・下』1988年は学界(主に神社界)の主な業績であったが、本研究を開始してからは伊勢市編『伊勢市史』の近代編および現代編が刊行された。どちらも注目すべき業績である。

2. 研究の目的

(1) 本研究「神都物語：伊勢の近現代史」の目的は明治維新を出発点に明治から大正・昭和をへて平成にいたるまでの伊勢神宮の歴史を通史的に語ることにあった。

(2) 通史と言ってもそれぞれの時代状況において伊勢神宮がどう構築・再構築され、どう対応してきたのかに注意を払い、あくまでも(広義の)社会との関係においての、その歴史を語ることを狙いとしました。

(3) 研究成果を日本国内の研究者のみでなく、一般の人々に対しても、そしてまた海外(主に英語圏)の日本研究者、日本に関心のある人々に対しても分かりやすく提供する目的があった。

3. 研究の方法

(1) 基本的に時代順をおって伊勢神宮の近現代史を辿ることとし、明治、大正・昭和(前期)、昭和(後期)・平成それぞれの時代において伊勢神宮の社会との移り変わる関係性を浮き彫りにすることとした。

(2) それぞれの時代の特徴を引き出しながらも伊勢神宮の、国民、国家(政府)、天皇との複雑な関係性を常に視野に入れる方法をとった。

(3) 明治期については激減した参拝者を伊勢神宮及び地元の実業家がどういう戦略をもって参拝者を再び伊勢に誘致しようとしたのか、また近代国家およびその主権者たる天皇がどのような関係を伊勢神宮と打ち立てようとしたのかを考察し、さらに空間論をもって明治期の伊勢(宇治山田)が新しく形成されていく力学を考察の対象とした。大正・昭和(前期)については、儀礼論を応用して昭和4年の式年遷宮の解明にあたったが、他にはメディア、教科書、そして伊勢神

宮自らの広報作戦の言説分析をおこない、伊勢神宮が日本の公共文化の中心に位置づけられていく過程を探った。昭和(後期)・平成に関していえば戦後の式年遷宮(1953年、73年、93年そして2013年のそれ)を軸に、宗教法人となった伊勢神宮がどのような戦後を歩んできたのかを検討してみた。言説の分析、神宮を中心とする伊勢の地勢の変化などに注目し、国民、国家、天皇の伊勢神宮に対する新たな関係の形成過程を取り上げた。

4. 研究成果

(1) 明治の伊勢神宮については

この時代の大きな力学は国家による伊勢神宮の管理、天皇による伊勢神宮との親密な関係の構築、日本人の伊勢神宮からの乖離、という複数の現象にあることを示した。

明治天皇による画期的な伊勢参拝(明治2年;歴代天皇の中で初めての伊勢参拝)が複数の連鎖反応を起こし、多くの改革へと導いたことを明らかにできた。ここで制度上、儀礼上の改革に触れながらも空間的な改革を中心に議論した。その空間的改革が地元の神職と中央の官僚との合作であったことを示したうえ、とりわけ天皇の歴史的参拝を相前後に実施された神仏分離、さらに御師の廃止や没落、そして内宮・外宮それぞれの空間的リフォームに光をあてた。後者については、宮域内の本殿、宝殿、垣などの再配置、また神宮司庁、神楽殿の新設によって抜本的な衣替えを実施したが、その結果は近代の伊勢神宮は閉ざされた空間、また近代国家の権力関係を反映した空間に生まれ変わったことを示すことができた。こうした空間的改革の到達点は、伊勢神宮は天皇が自らの祖先を祀る「大廟」への変貌にあったことを指摘できた。このように変貌した伊勢神宮は近代国家の管理下に置かれ、その将来は保障されるが、神宮改革には負の結果もあった。それは参拝者の激減にも(内宮の位置する)宇治と(外宮の位置する)山田という町の衰退にも見えた。維新まで御師を名乗る神職は全国から参拝者を伊勢神宮に誘致し、宇治と山田の繁盛に大きく寄与したが、彼らは明治の改革で廃止され、大きな打撃を受けたことを明らかにした。そこで、御師なきあとの伊勢に焦点を絞り、参拝者を再び伊勢に取り戻す戦略を考察した。まず旅籠屋の経営者(多くは旧御師)による戦略、次に伊勢神宮の神職自身による戦略を取り上げた。前者に関しては三日市太夫と角屋と油屋を事例にし、それぞれが歩んだ明治時代を調べた。三日市は御師時代とほぼ同じ「ビジネス手法」を用いたが、角屋と(もと遊郭の)油屋は近代的ビジネスモデルをもとめ、真正講に入り全国の参拝者(旅行者)にアピールする作戦をとった。さらに、神職による戦略としては、

主に神宮大麻（伊勢でいうお札のこと）の配布や神職が新しく開発した神学について調べた。明治期にはこれなどの戦略がこれといった効果もなく、参拝者の数は回復をみる事がなかった。それは参宮鉄道が山田まで敷設されたことにもかかわらずであった。

明治期については最後に調査したのは、神苑会の活躍であった。1880年に設立をみた神苑会は、宇治・山田の実業家や医者や神職から構成された民間団体だが、伊勢を近代化し、近代の参拝者を魅せる伊勢像をえがき、それを実現することに成功したことを神苑会史料にもとづき、示した。太田小三郎という人物が率いる神苑会は、内宮にも外宮にも神苑（＝新しい類の、近代的聖なる空間）を切り開くほか、倉田山でも土地を購入して、開拓し、博物館などの近代的施設を建設した。さらに内宮と外宮を倉田山経由でつなげる御幸道路まで作った。神苑会の遺産は、これにとどまらず、伊勢を「神都」とブランド化し、伊勢が全国的に「聖なる都」としての名声を博する基盤を作ったことを証明した。

（2）大正・昭和（前期）の伊勢神宮についてこの時代の大きな力学は伊勢神宮を離れていた国民が記録的な数で伊勢に戻ったこと、国家も天皇もこれまでにない新たな関係性を伊勢神宮と形成していったことにあるが、その史実を明るみに出さした。

20世紀に入ってからの伊勢神宮を理解する鍵は、昭和4年に実施された式年遷宮だと提案した。この遷宮は、明治維新以来4回目であったが、これまでのものと異なっていた。それは遷宮の、天皇、国家、国民との関係性をみて示すことができた。天皇は、明治初年から遷宮の儀礼と密接な関係が確立され、それが昭和まで続いたが、国家との関係は明治後半から大きな発展をみせた。その到達点は総理大臣が昭和4年の遷宮にはじめて参列したことにある。国民との関係でも、昭和4年は大きな展開があった。儀礼論を応用し、この遷宮が「国民儀礼」としてはじめて実施されたことを示すことができた。それは遷宮が行われた当日全国津々浦々の大勢の日本人が初めて遥拝式などに参加したことにもみえ、政府はそれが実現するように遷宮の日を公共休日にする工夫もした。さらに、この遷宮を相前後にこれまでにない数の日本人が伊勢を参拝するようになった。明治期では、伊勢への参拝者が激減する現象はあったが、昭和期となればその現象はなくなり、神都としての伊勢は再び日本でもっとも多く参拝者を引きつける聖地となっていく過程を示した。

なぜ20世紀に入ってからの伊勢神宮が、

聖地としての人気を回復できたかを説明するには、メディアの言説分析、国定教科書における伊勢神宮の記述の分析をおこない、また伊勢神宮自体が自ら行った、あるいは他の組織に委託した広報作戦を調査した。『朝日』を中心に新聞が近代の伊勢神宮をどう語ったのかもみた。昭和4年に入って新聞は様々な画像、あるいはこれまでにない情緒あふれる論調をもって読者に伊勢神宮をアピールする、新たな試みをしたことを指摘した。遷宮の直前にそれが急ピッチとなったが、他方で、国が認定した、大正以降の教科書を取り上げ、伊勢神宮、天照大神、万世一系の神話、お伊勢参りなどがどのように扱われたのかを分析してみた。要は、国史、国語、修身それぞれの科に伊勢神宮が姿を表し、戦前の教育全体の重大な柱となったことを示した。本研究者はさらに、神宮の宣伝にも目を配り、神宮教、神宮奉斎会、そして全国神職会の活躍をとりあげたが、神宮大麻の頒布運動が極めて重要な広報手段であったことを明らかにした。

このように、伊勢神宮をめぐる新聞の論調、教科書の記述、それに神宮の宣伝の他に日本が30年代に入って直面した国家的な危機をもって伊勢神宮に対する国民の認識が非常に高まることとなった。本研究者が大正・昭和期で調査した今一つの現象は、参拝者を迎えた宇治山田の空間のさらなる変貌だった。新しい現象としての、伊勢への修学旅行を取り上げ、生徒達を待ち構えていた宇治山田が空間的に明治からどう変わっていたのかを参宮案内書などによって調べた。重要だったのは、宮川電軌、朝熊山ケーブルカーの敷設に、倭姫宮、如雪園、宇治橋公園などの建設だったが、もっとも重視せざるを得ないのが大神都聖地計画だ。これは、昭和期の実業家が神苑会の事業を引き継ぎ、地元の、そして中央の政治家と手を結んで宇治山田を文字通り日本の「神都」にしようとする試みであった。政府主導の事業となったこの計画は結局戦争のため失敗に終わったが、その行方を辿ってみた。最後に明るみにできたのは、伊勢神宮の空間と戦争との密接な関係であった。戦利品の展示の場としての神苑、勝利祈願の場としての内宮、米軍の爆撃の的としての宇治山田にも光を当てることができた。

（3）昭和（後期）・平成の伊勢神宮について

この時代の主な力学は伊勢神宮が超宗教的な地位から一宗教法人に位置づけなおされたことにある、と議論した。憲法で信教の自由が保障される関係で国民は伊勢神宮を離れ、伊勢神宮の国家との関係も希薄化してい

った。それでも天皇は戦前から親密な関係を保持することに成功したことを議論した。1960年代からは伊勢神宮の脱法人化の動きが顕著になり、神社界は国家の伊勢神宮との親密関係を求める一方、神宮は国民の寄付金にたよる以上国民を対象に宣伝・広報活動に一層の力を入れた。

まず1953年に(占領のために遅れて)実施された戦後初の式年遷宮を軸に伊勢神宮を考え、宗教法人として出発した伊勢神宮の新しい有り様を描いてみた。伊勢神宮が「神宮規則」などにより終戦直後から皇室と特別な関係を保持できたことをまず証明した。また、伊勢神宮はこれまでに存在しなかった、神社本庁という宗教法人に所属し、そのなかで「本宗」という(耳慣れない)最高の位置づけをされたことを示した。重大な動きが伊勢神宮式年遷宮奉賛会の設立と、国民を対象にした募金活動であって、それぞれについて調査をし、伊勢神宮の終戦直後の苦難を浮き彫りにできた。

1973年の式年遷宮が行われるまでに伊勢神宮の脱法人化、公的ステータスの獲得への動きが本格的に始まっていたことを論説した。主な行為者は神社界であるが、岸信介、池田勇人などの政治家も神社界に同感していた。結論的には、1973年10月の遷宮の時政府はまだ距離を置いていたが、天皇の式年遷宮の諸儀礼との関係性が戦前なみではないにしても復活し始めていたことを議論した。他にも重要な動きとしては、一層強力な奉賛会が設立されたことで、それが政治、財界そして宗教の有力な人物の珍しい、特徴的な全国的な組織であったことを論じた。さらに、伊勢神宮は、法人化を否定する広報・宣伝を全国に配信しはじめることを本研究者が証明することができ、その中身の分析も行った。

1993年となれば天皇は20年前に比べ、より親密な関係を1993年の式年遷宮の諸儀礼と形成していったが、政府自体は依然として儀礼的距離をおいた。伊勢神宮は他方で国民の募金を必要とする以上国民を対象とした広報・宣伝活動を新時代(情報時代)に合わせた新たな方向へもっていった。それはマーケティングだが、研究代表者はその成果を評価した。1993年の遷宮に合わせて行われた今一つの動きは、伊勢のいわば地政学の改革であった。伊勢神宮や神社界ではなく地元の実業家が主導権を握って内宮前の空間(おほらい町)を抜本的にかえ、記録的な数の参拝者を伊勢に誘致することに成功したことに光をあてた。

2013年の式年遷宮において注目すべき現象は、色々あったが、安倍晋三総理大臣の遷宮参列はもっとも注目に値した。これは総理大臣による戦後初、史上2度

目の遷宮参列であっただけに無視できない。それは伊勢神宮の脱法人化をさらに進める狙いがあったことを議論した。他方で、記録的な数の参拝者が内宮を参拝したこと、なかでも伊勢新発見のパワースポットに惹きつけられた若者(とりわけ女性)の姿が多くあったことに注意をし、伊勢神宮が国民のプライベートの信仰の場であり続けたことを指摘した。天皇が依然として欠かすことのできない関係性を遷宮の諸儀礼ともっていたことはいうまでもない。以上のように国家、国民、天皇との絆は一層深いものとなっていったことを議論できた。さらに伊勢神宮及び神社界による遷宮前後の広報内容を分析した。遷宮ごとの広報内容が変わるが、1953年は信教の自由、1973年は万世一系の天皇、1993年はよみがえりだったが、2013年にはこれまでにない「伊勢神宮と大自然」が大きなテーマであったことを指摘することができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

ジョン・ブリー、伊勢神宮の公共性、本郷、査読無、118号、2015、18-20

ジョン・ブリー、神苑会と宇治山田：近代的聖地の形成をめぐる、瑞垣、査読無、231号、2015、39-56

ジョン・ブリー、京都の中の伊勢・現代の言葉、京都新聞(夕刊)、査読無、2015・3・16、7-7

ジョン・ブリー、近代的聖地としての伊勢、遷宮記念国際セミナー出雲と伊勢：古代王権と聖なる空間、査読無、NPO法人神道国際学会、2014、71-81

ジョン・ブリー、あら、うそやうそや：『妙貞問答』「神道のこと」について、末木文美土編『妙貞問答を読む：ハピアンの仏教批判』、査読有、法蔵館、2014、439-458

ジョン・ブリー、2013年の式年遷宮に思う、神道フォーラム、査読無、48号、2014、2-2

ジョン・ブリー、『神都物語』：明治期の伊勢、高木博志編『近代日本の歴史都市：古都と城下町』、査読無、思文閣、2013、351-383

ジョン・ブリー、近代化の中で変貌する伊勢神宮と出雲大社、歴史読本、査読無、6号、2013、112-117

〔学会発表〕(計 21 件)

ジョン・ブリー、The Sun goddess's progress: yearning for the past in post-war Ise, 2015、4、16、Institut für Ostasienwissenschaften, Japanologie, Vienna University, Austria

ジョン・ブリー、City of the Gods: Ise interventions in Meiji Japan, 2015、4、16、Institute for the Cultural and Intellectual History of Asia (IKGA) Austrian Academy of Sciences Vienna, Austria

ジョン・ブリー、Ise transformations in post-war Japan, 2015、1、23、Universitaet Tübingen, Zentrum für Japanische Sprache, 同志社大学、京都

ジョン・ブリー、伊勢神宮と戦後日本、土曜公開講座、2014、11、29、京都ノートルダム女子大学、京都

ジョン・ブリー、伊勢神宮と戦後日本、日本研究基礎論、2014、9、10、国際日本文化研究センター(京都)

ジョン・ブリー、Lies and more lies!': On Fabian Fucan's 'Shinto no koto' Panel: Fukansai Habian on Christ, Buddha, Confucius, and the gods: Myōtei Mondō in Early Modern Japanese Intellectual History, EAJS, 2014、8、29、Ljubljana, Slovenia

ジョン・ブリー、Lies and nothing but lies!': On Fabian Fucan's 'Shinto no koto、Asian Studies Conference Japan, 2014、6、21、上智大学、東京

ジョン・ブリー、Inventing Ise: the Ise shrines and the Meiji revolution, JSPS Summer Programme, 2014、6、12、総研大、葉山、神奈川県

ジョン・ブリー、Tales of Ise: the shrines, their priests and patrons in post war Japan、Handa Haruhisa Professorship Lecture in Shinto Studies, 2014、5、27、Department of Asian Languages and Cultures、UCLA、Los Angeles、USA

ジョン・ブリー、Borderlands: postwar Ise between sacred and secular, 2014、4、26、Portland State University, Center For Japanese Studies, Portland, Oregon, USA

ジョン・ブリー、Tales of Ise: the shrines, their priests and patrons in post war Japan、The Admiral David E Jeremiah and Mrs. Connie Jeremiah Lecture, 2014、4、24、University of Oregon, Eugene, USA

ジョン・ブリー、Ise, its priests and patrons in the postwar、Kyoto Asian Studies, 2014、2、25、同志社大学、京都

ジョン・ブリー、変遷する聖地 伊勢:

戦後を語る、第 264 回談話会、京都民俗学会、2014、1、31、京都

ジョン・ブリー、戦後の伊勢を語る: 神宮、天皇、社会、第 17 回人文科学研究「近代天皇制と社会研究」研究班、2014、1、25、人文科学研究所、京都大学、京都

ジョン・ブリー、戦後の伊勢を語る、日本研究基礎論、2013、12、5、国際日本文化研究センター(京都)

ジョン・ブリー、Ise inventions: the Meiji phase、Sengu: Rethinking the Renewal of the Ise Shrine in 2013, 2013、11、22、SOAS, University of London, London, UK

ジョン・ブリー、式年遷宮と伊勢の戦後、紫野の会例会、2013、10、29、京都

ジョン・ブリー、近代的聖地としての伊勢、遷宮記念・国際神道セミナー 出雲と伊勢: 古代王権と聖なる空間、2013、10、26、東京

ジョン・ブリー、Inventing Ise: the shifting fortunes of a sacred site in Meiji Japan、Kyoto und das Kansai-Gebeit als religioeser Raum シンポジウム、2013、9、28、チュービンゲ大学同志社日本研究センター、同志社大学、京都

ジョン・ブリー、『妙貞問答』と神道、シンポジウム『妙貞問答』の諸問題、2013、8、26、国際日本文化研究センター(京都)

21 ジョン・ブリー、戦後の伊勢を語る: 神域、俗域そしてメディア、国際シンポジウム 転換期の伊勢、2013、7、26-27、国際日本文化研究センター(京都)

〔図書〕(計 3 件)

ジョン・ブリー、吉川弘文館、神都物語: 伊勢神宮の近現代史、2015、181 頁

ジョン・ブリー、(編著) 思文閣、変遷する聖地: 伊勢、2015(近刊)、300 頁

John Breen (共著)、Bloomsbury、A social history of the Ise shrines: divine capital, 2015(近刊)、320 頁

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

ジョン・ブリーン主催、国際シンポジウム 転換期の伊勢、2013、7、26-27、国際日本文化研究センター（京都）

ジョン・ブリーン、テレビ出演、伊勢参りと日本人の巡礼、2013、6、1、14時-15時、NHK Eテレ名古屋

ジョン・ブリーン、パネリスト、式年遷宮記念シンポジウム、伊勢へ七度：日本人の巡礼観、2013、5、11、有楽町朝日ホール、東京

6. 研究組織

(1) 研究代表者

Breen, John (Breen, John)

国際日本文化研究センター・海外研究交流室・教授

研究者番号：90531062

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：